

「あ」系感動詞における語の認定について

姚 瑤

1 問題提起

日本語では、母音〔あ〕で構成される感動詞が豊富である。これらの感動詞は叫び声や泣き声などの生理的発声と異なり、ある程度記号化されているものとして、話し手の心的状態や感情を表現することができる。

- (1) あっ、携帯を忘れてしまった。(気づき)
- (2) 妻：お水を買ってきてね。
夫：ああ、わかった。(応諾)
- (3) あーあ、子供の頃に戻りたいなあ。(感嘆)

例(1)～(3)に示すように、「あっ」、「ああ」、「あーあ」といった形式は、同じ母音〔あ〕で発せられるものの、音声上においては音高、音長の変化、また表記上においては、促音「っ」や長音記号「ー」などの使用により、「気づき」、「応諾」、「感嘆」といった様々な意味機能を実現している。本稿では、このように母音〔あ〕で構成される感動詞の類を「あ」系感動詞と称する。

「あ」系感動詞における語の認定に当たり、主に二つの難点を克服しなければならない。一つは意味の不明確性と連続性にあり、もう一つは表現形式の多様性と共通性にある。

感動詞は、学校文法の品詞論では名詞や動詞と同じく自立語に分類され、単独で1つの文節を作ることができ、1語で意味を表すことができると言われている。しかし、感動詞の中、特に「あ」系感動詞は人間の喜び、悲しみ、思考の過程などの内面の状態をそのまま言語音に表すものであり、知的に未分化であるゆえ、名詞や動詞のような実質的な内容を表す品詞と違い、特にはっきりとした指示内容がなく、意味が不明確で曖昧である。その意味解釈は音声・表記形式や文脈に大きく依存する。例えば、単に表記形式《ああ》⁽¹⁾を見ただけでは、何を意味しているかを理解することが難しく、その音声や前後の文脈の分析を通して「感嘆」、「情報受容」、「肯定」、「呼びかけ」などの意味解釈が得られるのである。また、「受け入れ」や「肯定」といった意味解釈に連続性があり、厳密に区別できないこともある。

二点目の表現形式の多様性と共通性について、例えば感嘆を示す〔ああ〕は音声で表出される

場合、感情の内容、起伏の高低や話し手の属性に影響され、高い平ら、下降、上昇など様々な音声形式がありうる。また文字表記として現れる時、《ああ》のほか、《あー》、《あああ》、《あ〜》、《ああ》など、バラエティに富んだ表記形式が見られる。

2 先行研究

「あ」系感動詞の中、「あ」、「ああ」に関する研究が多くなされている。まず、認知的なアプローチからの研究として、森山（1996）、田窪・金水（1997）や富樫（2005）などが挙げられる。

森山（1996）では「あ」を「未知遭遇」の感動詞として捉え、「新情報、新しい事態を受け入れる方向でのもっとも未分化な遭遇反応として使われる」（p.56）と述べている。それに対し、「ああ」については「新たな事態との遭遇における急激な反射的反応とは違って、（たとえ何らかの事態との遭遇をそれ以前に経験していたにせよ）内的な情意の動きとして、一定の時間をもって発せられる」（p.54）と論じている。

田窪・金水（1997）は、感動詞、応答詞を「外部からの言語的・非言語的入力があったときの話し手の内部的の情報処理状態の現れ」として捉えた上、「あ」、「あっ」を「発見・思い出し」の類に位置づけ、「自分で発見した情報を新規に登録する際の標識である」と定義している（p.261-p.264）。一方、「ああ」については「肯定応答」、「嘆息」に用いられるという。また、「この「嘆息」系の音調の変種として、下降した後上昇して終わる「あああ」がある。この場合にはもっぱらマイナス評価が続き、時に相手を非難する発話が続く場合もある」（p.273）と、「あーあ」についても触れた。

富樫（2005）は、感動詞の機能を機能的側面と伝達的側面に分け、機能的側面を中心に「あっ」、「わっ」を分析し、「あっ」の本質は前述の先行研究で述べている「新規情報の登録」、「発見」を示すものではなく、「情報の新旧といった処理操作以前の、あくまでも変化点の認識を示す」（p.244）ものと指摘している。それに対し、松岡（2018）では談話展開の観点から「あ」の使用に注目し、「あ」を「弁別刺激に対する「気づき」を表すマーカーである」（p.54）と定義している。

音調の記述について、須藤（2008）は日本語のアクセント・イントネーションの枠組みで日本語の感動詞全般に対応できる音調記述を試みた結果、1音節感動詞「あ」の音調を「有核と無核という二つのアクセント型と平調を含む複数の語末音調によって説明できる」という「第三のタイプ」に分類し、「あ」がとりうる音調とそれに伴う代表的な意味・機能を表1のように整理した。

このほか、方言学的なアプローチから、友定（2005）では発話開始部の感動詞を「立ち上げ詞」と捉えた上、こうした「立ち上げ詞」の運用の地域差の一例（例（4））として、福島県河沼郡勝常村方言における立ち上げ詞「アー」の用例は「東日本（東海より東）の地点に多くみられ、西日本（近畿より西）には、熊本県熊本市に見られる程度である」と挙げている。

表1⁽²⁾ 【資料】感動詞の音調と代表的な意味・機能（一部）

感動詞（バリエーション）	音調	代表的な意味・機能
あ（ああ／あああ／あ？ ／あっ／はあ／はああ／ は？／はっ）	ア ^ː ー	肯定的応答，承認，受け入れ，思い出し
	ア ^ː ー「ー	落胆，不安，不満
	ア ^ː ー	理解不能，乱暴な問い返し
	ア ^ː ー	瞬間的な反応としての肯定的応答，発見，思い出し

(4) A アー オハヨーゴザイマス。

B アイ オハヨー。(p.61)

上述のように、「あ」系感動詞に関する研究は、個別の具体的な表現形式の意味機能や音調の分析を中心に多くなされている一方、各意味機能の関係、つまりその連続性と差異性についての論述が少なかった。語の認定については、「あ」と「ああ」を区別して考えるという点が共通認識になっているものの、さらに詳細な論述は調べた限りほとんどなされていない。

従って、本稿では先行研究を参考し、認知言語学の観点から各表現形式の意味を整理し、関連性が認め難い意味機能については区別して別語と認識する。また関連性がある意味機能については一つの多義語と認定しつつ、プロトタイプ的な意味と拡張的な用法を分けて考える。さらに、「あ」系感動詞の表現形式が豊富であるとはいえ、制限なく自由に変化できるというわけではない。一つの語を特定するために、表現形式の拡張できる範囲が実際様々な制約を受けている。従って、本稿では、コーパスを利用し、個々の感動詞の表現形式がどのような音声・表記の変化を許容するか、どこまで拡張できるかをも見ていく。

3 「あ」系感動詞の分類

3.1 分類方法と使用データ

分類方法について、「あ」系感動詞は主に話し言葉に用いられるため、まずはその音声的特徴に基づき、モーラ数によって大まかに[あ]、[ああ]、[あああ]という三つの形式に分類する。⁽³⁾その上、それぞれの形式の各意味機能の区別に基づき、語の認定を試みる。

「あ」系感動詞の意味解釈はその音声形式、前後文脈、表記などに大きく関与される。本章では主に音声形式と文脈に集中し、日本語日常会話コーパス（モニター公開版）（以下 CEJC モニター版）⁽⁴⁾を用いて「あ」系感動詞の意味分析を行う。CEJC の語彙素分類の中、母音[あ]によって構成される感動詞として、「あっ」（5085件）、「ああ」（5055件）と「あー」（154件）が見られた。その中、「あっ」、「ああ」は「小分類—感動詞—一般」に、「あー」は「小分類—感動詞—フィラー」に分類されている。

CEJC の転記基準について、臼田（2018）では、「えっ」や「あーあ」などの感情表出系感動

詞は語彙を定めず原則として聞こえた通り表記すると規定され、フィラーについては、「あ（一）」のような形式であり、「かつ場つなぎ機能を有するものに限定して認定する」とされている。さらに、応答系感動詞や呼び掛け、掛け声については、「基本となる語形が想定可能な場合には、曖昧に発音されている場合でもその基本となる語形で転記する。促音および長音が挿入される場合には、派生の語形として「っ」「ー」を用いて表記する」としている。(p.180-p.181)

CEJC モニター版には、収録した音声を転記したテキストに対して UniDic（小木曾・中村 2014）で解析された短単位の形態論情報（小椋ほか 2011）が付与され納められている。小椋ほか（2011：121）の規定により、「ああ」は感動「感動詞——一般」に分類され、「あ」のようなフィラーと判断されるものとそうでないものがある語には、それに応じて「感動詞——一般」か「感動詞——フィラー」の品詞が付与されている。

しかし、実際のデータを分析すると、その分類に大きな誤差が見られ、「あ # あれキングコンダの西野だったね」（CEJC K0001_013：72790）のような気づきの用法も「フィラー」に分類されていることが多く観察された。そのため、本稿では、CEJC の分類に従わず、「あっ」、「ああ」と「あー」の三つの語彙素からそれぞれ 40、100、40 例を抽出し、「さあー」のように前の語の長音化とみられる 3 例を除き、合計 177 例を研究対象とし、その意味機能の再検討を試みた。その結果、以下のような音声形式と意味機能の対応が見られた。

3.2 「あっ」の意味機能

(5) A：あっ① # そそう # あのラー油とねラー油塩がね結構おす # あっ② # ラー油ってかごま油塩が結構おすめだよ

B：あっ③ # どれですか

A：ごま油と塩をこうレバ刺しで食べる

B：あー # はいはいはいはい (CEJC T006_004：161950)⁽⁵⁾

(6) A：二週間に一回しかやんないし # めちゃ楽し # まずテストテストないんです

B：あ④ # ないですか (CEJC T006_002：131330)

例 (5) に示すように、「あっ」は①急に ごま油と塩をレバ刺しで食べるとおいしいという既知情報あるいは経験の想起、②ラー油ではなかったという自分の言い間違いに対する気づき、③相手の発話への気づき④テストがないという予想外の情報に対する驚きといった場面に使われている。②と③はそれぞれ自分の発話ミスと相手の発話行為に対する気づきで、何かの新しい情報と瞬間的に接することにおいて共通している。また①は話者の既知情報でありながら、本来潜在していた情報や経験が急に能動あるいは受動的に顕在化したことに対する気づきである。つまり、「あっ」は何かの情報との遭遇瞬間を言語化したもので、情報源が話者の内部からでもよく、外部からでもよく、また情報の新旧とも関係せず、単に何かの情報との遭遇⁽⁶⁾だけを表す語である。

この遭遇はいま・ここ・私という条件を満たした即時的、瞬間的なものでなければならない。他人の代わりに「あっ」を言うこともなければ、過去の気づきについて述べる際に「あっ」を使うこともない。本稿では「あ」のこのような「情報遭遇」の意味を「気づき」と記述する。⁽⁷⁾ 177例の中、69例の気づきの「あっ」が観察された。その音声形式として、63例が1モーラの平坦調で、6例が2モーラの下降調であり、2モーラ以上の音声形式が見られなかった。

さらに例(6)の④は予想外の情報に対して驚いた場面に使われているが、その驚きの感情が読み取れるのは「あっ」が機能しているというより、文脈(テストがない)と音声(高く発音されている)の共同作用であり、「あ」の本質的な意味は「気づき」であるという点においては変わりはない。これに関連し、富樫(2005)は例(43)を挙げて、「「あっ」は強い驚きとして解釈されないので、あまりにも意外である・驚いている」ことを表現できないのである。」と述べている。つまり、「あっ」の「驚き」の意味解釈はあくまでも文脈、音声などの作用から生じる副次的な効果であり、「気づき」という本質的な意味によってその作用が制限されているのである。(43) (不意に後ろから友人に抱きつかれて)

A: ??あっ、びっくりした。

B わっ、びっくりした。(p.248)

以上、例文の分析により「あっ」の用法を整理し、比較してみた。その結果、「あっ」のプロトタイプ的な意味機能は情報に対する「気づき」であり、文脈や音声の作用で話者の感情の起伏が激しく捉えられる場合は「驚き」という周辺の意味も取れることが分かった。

3.3 「ああ」の意味機能

例(7)～(11)に示すように、「ああ」には主に①感嘆、②情報受容、③肯定応答、④ためらい・言いよどみ、⑤注意喚起といった五つの用法がある。

(7) A: やだ# あー①# もう絶対なんか慣れない気がする (CEJC K001_011: 22570)

(8) A: 長生きするためにはどうしたらいいかつうことを習ってそれを習ったら今度自分も老人会にいるからそうゆうね皆さんにそうゆうねま教えるあれ勉強してんだ

B: あー②# そうですか# でもアーお父さんあんまり無理に長生きしないでいいですよ

(CEJC T004_005b: 72710)

(9) A: あのただどっかであの同じ答えが二つ続くようなところはたぶん取れてんだろうけど

B: あー③# 取れてる

(CEJC T006_002: 61340)

(10) A: これってなんか醤油いる# 醤油しかないんだけど# あとポン酢がある

B: あー④# ん醤油でいいです

(CEJC C001_012: 760)

(11) (前の人が財布を落とした時) ああ⑤、君、君、財布を落としたぞ。(作例)

例(7)の①は「ああ」のもっとも基本的な物事に感じて発する「感嘆」の用法である。「感嘆」

の「ああ」は本来ほとんど生理的な発声で、話者の感情起伏や心的変化と緊密に繋がっており、知的に未分化である。森山（1996）が述べたように、「急激な反射的反應とは違って」、「内的な情意の動きとして、一定の時間をもって発せられる」ものが一般的で、緩やかな下降調を取ることが多いが、「ああ、寒い」のように即時的に寒さを感じて上昇調で発する場合もあり、実際は多様な音声を呈し、音声の調整が非常に自由である。177例の中、14例の「感嘆」の用法が見られ、1モーラから4モーラ以上、上昇調、下降調、上昇下降調など、多様な音声形式が観察された。

例（8）の「あー」は相手の発話を理解し、受け入れたことを意味するものであり、「情報受容」の用法として86の用例が見られた。そのほとんどが2モーラの下降調で、2モーラから4モーラ以上の上昇調のものと、3モーラ以上の上昇下降調のものもあった。注意すべきところは、この「あー」は情報を受容したことを表すだけで、必ずしもその情報に対する肯定には至っていない。それで後文に逆接の「でも」が接続可能なわけである。それに対し、例（9）のように、真偽疑問文や確認要求の文に対する応答として使われる場合、否定の文脈が後続しない限り、「ああ」によって示された情報の受け入れがそのまま肯定の回答として推論され、「肯定応答」（2例、2モーラの下降調）という派生的用法が生じたわけである。

また、言うまでもないが「ああ」の「肯定応答」の用法は聞き手の存在を前提としている。また比較的に乱暴な応答表現であり、普通丁寧な話し方が要求される場面では避けられている。それに対し、「情報受容」の「ああ」にはこのような制約が少ない。一人で本を読んでその内容に納得した時にも「ああ、なるほど」と言えて、必ずしも相手の存在を要求せず、むしろ「気づき」の「あっ」と同じく、本来伝達を目的とせず、聞き手が存在する場合だけ伝達機能が生じると考えたほうがよいだろう。もともと伝達を目的とせず、聞き手に対する配慮が必要でないため、そこから派生した伝達中心の「肯定応答」用法が丁寧にならないのも自然である。さらに、韻律的な特徴について、「情報受容」の「ああ」も「肯定応答」の「ああ」も下降調を取るが、「情報受容」の「ああ」は情報を受け入れるのに時間がかかった場合に長音化が許容され、また何回も重複可能である。さらに上昇調を取る場合は「受け入れ不能」を意味し、疑問のイントネーションが付け加わった音声形式と認識することができる。それに対し、「肯定応答」の「ああ」は普通2モーラ以上に伸ばすことができない。重複可否に関して、例えば孫が祖父に「あした遊んでね」と言った時の返事として、「ああ、ああ、いいよ」のように応諾の場合は2回繰り返すことが可能であるが、「明日大学に行く？」のような真偽疑問文に対して肯定応答をする場合、「ああ、ああ」と2回重複すると不自然になる。

例（8）の場合、「あっ、そうですか」のように、気づきの「あっ」を用いることも可能である。情報の処理はある程度の時間を要することが普通であるが、処理するための労力が少なく、処理時間が極めて短い場合、情報の遭遇と受容はほぼ同時に行われるので、「あっ」と「ああ」の違

いが区別されなくなる。しかし、情報の量が膨大な場合、たとえば、アルベルト・アインシュタインの特殊相対性理論の説明を聞き、「あ、なるほど」と軽く受け入れることはまずないだろう。

④は情報処理中、つまり考え中の合図として、「ためらい」の意味が読み取れる。普通は平坦調あるいは自然下降を取る。「ためらい」の「ああ」は音長の制限がもっとも少なく、長く言い伸ばすことができる。今回の調査では7例が見つかり、そのモーラ数は1から3で不等であるが、すべて平坦調であった。

例(11)では、「ああ」の発声で聞き手の注意を喚起し、呼びかけの機能を実現している。本調査ではこのような「ああ」が出現していなかった。「注意喚起」の「ああ」は「肯定応答」と同じく、聞き手の存在を前提としながら、中立、下向き待遇で、普通は年上の男性が対等以下の相手に対して用いることが多い。音調は原則下降調とされているが、「ああ、すみません、ちょっとお聞きしたいのですが、」のように、ためらいながら相手の注意を呼び起こす場合は平坦調を呈することもあり、同時に二つの機能を果たすことがある。

従って、表現形式「ああ」における語の認定について、「肯定応答」は「情報受容」からの派生したものであり、意味的なつながりが強いと、まとめて一つの語として認定し、そのプロトタイプ的な意味を「情報受容」と捉える。「ためらい」の「ああ」は情報処理中の合図で、情報受け入れが完了したかどうかという点において「情報受容」の用法との違いが大きいと、分けて考える必要がある。また、「感嘆」の「ああ」は情報に対する思考的な反応ではなく、情動的な側面が主になるため、独立性が高い。また、「注意喚起」の「ああ」は話し手の情動や思考に関連せず、伝達機能しか有さないところから、別語として認識したほうがよいと思われる。

よって、「ああ」という表現形式は意味の独立性から、少なくとも「情報受容」の「ああ」、「ためらい」の「ああ」、「感嘆」の「ああ」、「注意喚起」の「ああ」という四つの語に区分することができる。

3.4 「あーあ」の意味機能

CECJにおいて、3モーラの[あああ]の例文は15例あった。その中、3.3に述べた「感嘆」、「情報受容」、「ためらい」の三種類の「ああ」の長音化された形式と、「情報受容」、「感嘆」の「ああ」からの音調の変化が行われた形式が見られた。音を伸ばしたことによる語の本質的な意味の変化が観察されなかったため、ここでは取り立てて説明するまでもない。このほか、「情報受容」の「ああ」の変形として、話し手の感情起伏により、本来下降調を取るべきものが一度上昇してから下降する音声形式(3例)が観察された。これにより、情報を処理するための労力や、話者の感情の激しさなどが聞き取れる一方、本来の「情報受容」の意味は変わらない。

それに対し、「感嘆」の「ああ」の変形として、下降上昇調の「あーあ」の用例がいくつか見られた。

(12) A : あーあ # 一個食べたかったな

B : 駄目です

(CEJC K004_011 : 28550)

例 (12) のように、下降上昇調の「あーあ」(2 例) は「残念」、「不満」の気持ちを表している。また、対他的発話の場合では、相手に対する不満や揶揄などの派生的な意味も捉えられる。この形式について田窪・金水 (1997) でも、「この「嘆息」系の音調の変種として、下降した後上昇して終わる「ああ」がある。この場合にはもっぱらマイナス評価が続き、時に相手を非難する発話が続く場合もある」と言及している。このような「あーあ」は感情表出の点において「感嘆」の「ああ」と類似しているが、マイナス的な感情しか表すことができず、「感嘆」よりも意味が特定されている。また相手に対するマイナス的な評価をする際にも用いられ、伝達機能を有する。さらに音調も下降上昇調に定着しているため、「残念・不満」の「あーあ」は感嘆の「ああ」から分化した独立の語と扱うほうが適切だと考えられる。

3.5 本章のまとめ

以上、本章ではまず母音 [あ] で構成される諸感動形式を音節数によって [あ]、[ああ]、[あああ] に分類した。その上、それぞれの形式の各意味機能の独立性に基づき、「あ」系感動詞を「気づき」の「あっ」、「感嘆」の「ああ」、「情報受容」の「ああ」、「ためらい」の「ああ」、「注意喚起」の「ああ」と「残念・不満」の「あーあ」という六つの独立の語に区分してみた。

4 「あ」系感動詞の使用制約

前述したように、「あ」系感動詞の表現形式が非常に豊かであるとはいえ、その音声、表記形式を完全に自由に変化させられるというわけではない。語の意味を特定するための最も処理労力がかからない、いわば常用の表現形式や使用場面もあれば、それより周回的なものもある。中心的表現形式から離れれば離れるほどもとの意味解釈が難しくなる一方、語によって意味素性や使用範囲が異なるため、もとの意味解釈が可能になる使用制約も異なってくる。本章では主に音声、表記形式と聞き手関与の観点から各「あ」系感動詞の使用制約を検討する。

4.1 典型的な音声、表記形式とその周辺

第3章でも簡単に述べたので部分的に内容が重複するが、本節では第3章のCEJCによる「あ」系感動詞の音声形式の調査結果に、日本語書き言葉均衡コーパス（以下BCCWJ）を利用したその表記形式の調査を加え、各「あ」系感動詞がどのような音声形式と表記形式が観察できるかを見ていく。表記形式についてはBCCWJを利用し、同様に180例を抽出し、「書字形出現形」の欄に基づき、実際の表記を調査する。勿論、コーパスのデータ量はあくまでも有限であり、すべての形式を包含することができなく、ある形式がコーパスにないからといって、実際にも存在しな

「あ」系感動詞における語の認定について

いと限らない。ただ、本稿ではその典型的な形式を中心に考察するため、この調査方法は十分に有効であると考ええる。

まずは調査結果を表2にまとめておく。表2に示すように、見出し行では左から右の順で、各感動詞の「典型的な音調」欄、音声の高低起伏が変化可能かを示す「音調調整」欄、言い伸ばしが可能かを示す「長音化調整」欄、「典型的な表記」欄とそのほかの表記を示す「表記のバリエーション」欄となっている。

「気づき」の「あっ」は基本韻律的な調整ができず、2モーラ以内に発せられるものしかなかった。それに対応する表記形式も少なく、主に「あ」、「あっ」が用いられ、「アッ」「ア」という形式も出現しているが、用例が極めて少なかった。一方、感嘆の「ああ」は緩やかな下降を呈することが多いが、話者の心的状態や感情の内容により、上昇、高平らまたは起伏の音調が出現し、長く伸ばして言う場合もある。それに応じて表記では漢字、平仮名、片仮名、ひいては長音記号「ー」や波線「～」など多様な表記方法が用いられている。

「情報受容」の「ああ」については、下降の音調を取ることが一般的である。上昇する音調も見られたが、「ああ、そう㍻」のように後文脈と連続して発する場合を除けば、最終的には下降を取らないと「情報受容」の意味が聞き取れない。このような上昇下降調の「ああ」はある程度の長音化が許容されるが、下降調の場合長く言い伸ばすと「ためらい」の「ああ」に近くなり、「情報受容」の意味が聞き取りにくくなるのである。そのため、文字化された場合にも、普通は

表2 「あ」系感動詞の典型的な音声・表記形式とその周辺⁽⁸⁾

	典型的な音調	音調調整	長音化調整	典型的な表記 ⁽⁹⁾	表記のバリエーション
気づきの「あっ」	平坦	×	×	あ、あっ	アッ、ア
感嘆の「ああ」	下降	○	○	ああ	あー、ああっ、ああ、あー、アア、噫、嗚呼、あゝ、
情報受容の「ああ」	下降	△ (上昇下降調可能)	△ (3モーラ以下可能)	ああ	あー、ああ、あゝ、ああっ、アア
ためらいの「ああ」	平坦(長)、自然下降	×	○	あー	ああ
注意喚起の「ああ」	下降	△ (平坦調可能)	○	ああ	あー
残念・不満の「あーあ」	下降上昇	×	×	あーあ	ああ、あー

×：調整不可 △：調整可能が制限なり ○：調整可能

2文字に表記され、3文字を超える表記はなかった。このほか、表には示していないが、「情報受容」の派生用法である「肯定応答」の「ああ」はさらに音声的な制約が厳しく、はっきりとした下降でしか用いることができない。

「ためらい」の「ああ」は音調の調整ができず、平坦調あるいは自然下降しか取らない一方、音の長さに関しては制限がないため、長音符号「ー」で表記されることが多い。「注意喚起」の「ああ」は原則として下降調を取るが、非典型的な音調として長めの平坦調もある。この音声形式は「ためらい」の「ああ」と連続しており、周辺のなものと考えたほうがよいだろう。最後に「残念・不満」の「あーあ」は「感嘆」の「ああ」から分化したものとして、音声形式が下降上昇調に定着し、表記については「あー」、「ああ」とのゆれも観察できるが、基本的に「あーあ」で統一されている。

4.2 聞き手関与と伝達機能

森山・張（2002：130）によると、感動詞は一人で発話できるかどうかという分類基準で対他的感動詞類と非対他的感動詞類とに二分することができ、「非対他的感動詞は、聞き手不在の発話もできる一方、話し手の心的状況をモニターすることで、聞き手に対して談話展開を制御する機能も持ち得る。一方、対他的感動詞は聞き手めあての機能しかない。」

この分類基準で「あ」系感動詞を分類すると、

非対他的感動詞類：「気づき」の「あっ」、「感嘆」の「ああ」、「情報受容」の「ああ」、「ためらい」の「ああ」、「残念・不満」の「あーあ」

対他的感動詞類：「注意喚起」の「ああ」

のように分けられる。しかし、実際の使用状況から見ると、同じく非対他的感動詞類でも、独話中心の「気づき」の「あっ」、「感嘆」の「ああ」と「ためらい」の「ああ」に比べると、情報受容の「ああ」は明らかに対他的な使用が多く、聞き手関与の度合いが高い。また丁寧さの観点から見ても、前三者は目上の相手が存在する場合にも問題なく使えるが、情報受容の「ああ」は不しつけと思われることが多い。また「残念・不満」の「あーあ」も目上に対して用いることは減多にない。このように、本来同じく独話中心に使われる「あ」系感動詞の中、聞き手が存在する場合、談話の場面、聞き手との関係によってその使用が制限されるものもあれば、そうでないものもある。その制約は主に丁寧さの低下として表現される。また、伝達機能しか有さない「注意喚起」の「ああ」も同様にこのような丁寧度の制限を受けている。

以上、本章では音声・表記形式および談話場面における聞き手との関与を中心に「あ」系感動詞の使用制限を検討した。その結果、「感嘆」の「ああ」は最も表現形式が豊富で、音調調整可能の範囲が広い。一方、「気づき」の「あっ」と「残念・不満」の「あーあ」はそれぞれ意味の未分化性と狭義化により、表現形式の制約が多い。また、聞き手関与の観点からはもともと非

対他のとされる「情報受容」の「ああ」が談話に用いられると、場面の特性や相手との関係によって制限され、中立・下向きの待遇につながる事が分かった。

5 終わりに

本稿では、母音「あ」で構成される感動詞を「あ」系感動詞と称し、そこに現れる諸表現形式を音節数によって分類した上、それぞれの形式の各意味機能の独立性に基づき、語の認定を試みた。その結果、「あ」系感動詞を「気づき」の「あっ」、「感嘆」の「ああ」、「情報受容」の「ああ」、「ためらい」の「ああ」、「注意喚起」の「ああ」と「残念・不満」の「あーあ」という六つの語に区分した。さらに、コーパスに基づく分析を通して、それぞれの語の音声・表記形式および談話場面における使用制限を検討し、各「あ」系感動詞の表現形式の調整範囲と談話における使用の制約の異同点を明らかにした。今後はこのような研究手法を他の母音系感動詞類に応用し、この類の感動詞全体からそのメカニズムを解明することを目標とする。

注

- (1) 本稿では、語をあらわす場合、音声・音韻をあらわす場合と表記をあらわす場合の書き方を区別するため、次のような表記方法をとる。なお、引用の場合は原文の表記に従う。
「ああ」：語
[あー]：発音（音声）
《ああ》：表記
- (2) 須藤（2008：52）の【資料】から「あ」の部分を抜粋したものである。「ㇿ」は顕著な上昇を示すものである。ただし、「はあ」などが「あ」に含まれる理由は明らかではない。
- (3) 4モーラ以上の音声形式も見られたが、語の認定の観点から、上述の三つの形式に包含することができるので、ここでは論じないこととする。
- (4) 国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」で構築中の200時間規模の日常会話を収めたコーパスである。2018年12月に50時間分の会話データをモニター公開した。
- (5) CEJC から例文を引用する場合、「#」で発話単位の区切りを示し、文末に（CECJ 会話 ID：開始位置）と示す。
- (6) 森山（1996）の「未知遭遇」という用語を参考したものである。
- (7) 慣用句「あっという間に」の意味も「あっ」の瞬時的な側面に関連していると言えよう。
- (8) 本稿では、「あ」系感動詞の音調について、その典型的な音声形式をアクセントと考え、その周辺的な音声形式をイントネーションによって影響されるものと考えているが、その具体的な検討は今後の課題としたい。
- (9) 表記が2種類以上ある場合、例文の数の多→少の順で並ぶ。

参考文献

- 森山卓郎（1996）「情動的感動詞考」『語文』65、大阪大学国文学研究室、pp.51-62
田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編、くろしお出版、pp.257-279
森山卓郎、張敬茹（2002）「動作発動の感動詞「さあ」「それ」をめぐって一日中対照的観点も含めて」『日本語文法』

2 巻 2 号、日本語文法学会、pp.128-143

富樫純一（2005）「驚きを伝えるということ—感動詞『あっ』と『わっ』の分析を通して—」、串田秀也・定延利之・伝康晴編『シリーズ文と発話第 1 巻活動としての文と発話』ひつじ書房、pp.229-251

友定賢治（2005）「感動詞への方言的アプローチ「立ち上げ詞」の提唱—」『言語』Vol.34、No.11、大修館書店、pp.56-63

須藤潤（2008）「日本語感動詞の音調記述の試み—音節感動詞を中心に—」『音声言語 VI』近畿音声言語研究会、pp.29-52

小椋ほか（2011）『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第 4 版（下）』国立国語研究所

小木曾智信・中村壮範（2014）『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報アノテーション支援システムの設計・実装・運用』『自然言語処理』21(2)、pp.301-332

定延利之（2015）「感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて」『感動詞の言語学』ひつじ書房、pp.3-14

白田泰如・川端良子・西川賢也・石本祐一・小磯花絵（2018）『『日本語日常会話コーパス』における転記の基準と作成手法』『国立国語研究所論集』15号、pp.177-193

松岡みゆき（2018）「『あ』の中核的意味とその外延的事象について」『名古屋大学日本語・日本文化論集』25、名古屋大学留学生センター、pp.37-57

柏野和佳子（2019）『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に見られる応答表現』『言語資源活用ワークショップ発表論文集』4、pp.368-380

小磯ほか（2019）『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴』『言語処理学会第25回年次大会発表論文集』、pp.367-370